

学校経営のポイント

“気象予報士試験”と“プロ棋士”の合格

若井 彌一

“暗い話題が何かと多い 稀に心が弾むネタ”
話題としては小さいが、ほほえましく、また頼もしい話題に出会うと、心が軽くなる。今回は、そんな話題を提供し、学校経営・教育実践の参考に供したい。

“好きこそもの上手なれ”の好例

今年1月に実施された第21回気象予報士試験に、兵庫県下の私立灘中学校2年生・岡島悟君（14歳）が、これまでの最年少合格を果たした。

これまでの最年少記録は、2003年8月実施の試験で合格した中学3年男子の14歳8ヵ月であったが、岡島君は14歳1ヵ月という。こんな記録はいつでもよいのだが、この少年が「幼稚園のころから地図に天気図を書き込むのが好きで、小学校4、5年からほぼ毎年受験していました」との母親の弁には注目したい。

簡単に受かる試験ではない。今回の試験は受験者数4,555人（うち女性856人）、合格者262人（同37人）であり、合格率5.8%の難関である。

ちなみに、合格の最高齢者は66歳、平均年齢は35.5歳という（今回）。「将来は研究職に就く夢を持っているようです」（母親の弁）という。楽しみである。（3月6日付け『新潟日報』による）

もう一つの話は、東京大学法学部3年に在籍する学生・片上大輔君（22歳）が、将棋のプロ棋士に登竜したという話題である。

片上君は、将棋との出会いは4歳のころで、いとこが将棋をやっているのを見て覚えたという。小学校入学前に将棋大会に参加し、その後、広島市内の将棋道場に通いはじめる。

2000年、広島修道高校から東大文科I類に合格したが、「将棋がなによりもおもしろい」と、関東

奨励会に移籍して将棋の修行を続けた。

プロ棋士への道がどんなに厳しいかは、解説するまでもなからう。新聞の解説記事では「東大法学部へ入るのは、もちろん難しい。だが、プロ棋士になることも、それ以上の難関だ」と、記者が書いているが、誇張ではない。将棋を少しかじったことのある人ならば実感できよう。プロとしてどこまでがんばれるか、期待したい。（2月24日付け、同紙）

学校での“学習意欲を高める”取組みを

小学校でも中学校でも、教師の学習指導案のなかで、あるいはその解説（口頭であれ、文章であれ）で頻りに使われる用語がある。児童・生徒の「願い」「思い」「興味」「関心」等である。

これら頻用される「児童・生徒の」「願い」「思い」「興味」「関心」という聞こえのよい言葉が、どれほどの確かな事実や実態に裏づけられているものであるかを、各学校で、各教師が点検してみる必要がありそうである。

平成14年度の高等学校教育課程実施状況調査では、「勉強が好きだ」という項目につき肯定的回答のできた生徒の割合が20%にすぎない。

別の調査では、小学校6年生の場合、肯定的回答が33.5%、中学校3年生の場合は17.8%である。「好き」でもなく「楽しく」もない学習は長続きしないし、また、表面的に継続したとしても、内容が身につかない。

児童・生徒の内なる学習意欲を高める授業と指導・相談活動に一層の工夫をもって臨みたいものである。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授）

★好評発売中！

B5判 210頁・2500円★

改訂学習指導要領 全文と要点解説

●新刊案内●

3月23日刊！ 申込み受付中

教育開発研究所刊

改革の流れを的確に整理！ 最新の資料と演習により“教育新時代”の経営課題を探る

『教職研修 '04 情報版』 菱村 幸彦（国研名誉所員）監修
B5判 270頁・定価 2625円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）